今A部内は焦熱地獄

なくならぬ熱中症患者

三川鉱

今、三川鉱A部内（本層四十卸＝三百五十メートル坑道）は焦熱地獄だという。会社はまかしたかわからぬが、たしかに熱中症にかかって倒れ、担架でかつぎあげられたなかまもいると、怒りをぶちまける人がいる。

今三川鉱のA部内で働いている労働者は、熱さにまいっている。三十二～三度どころか、四十一～二度という熱風に追いまくられて作業する例さえあると。

上下段払いのうち、上段を払った跡から地熱が風を呼び起こして吹きつけてくるわけで、会社はフライアッシュで充填してはいるものの、それが固まるにつれ、上の方にすき間ができ、そこから熱風の襲来となる。

そんなとき、以前採掘し終った払跡にからくも逃げこんで、しばし熱さを避けるのが常。

ところが、そんな高熱のなかで熱中症患者が出ると、なるほどあわてて担送してかつぎあげてゆくものの、それを会社は正しく〝公傷〟として取り扱っているのかどうか。疑問だらけ。

安全競争に目がくらんだ余り、

×

下段払いから流れてくる涼しい空気の効など、払い跡から吹きつけてくる熱風に消されてしまう。それどころか、涼風と熱風とが混り合って水蒸気が発生。足もとも見えなくなってしまう。

職場分会で抗議しても、「どうにもなりません」と職制。

なるほど、いろいろ対策を講じてはいるらしいというが、それも「金をかけぬ方法」ばかり探してのことだから、初めからラチがあかぬことは百も承知。

三川鉱A部内の熱気は、風の流れにしたがいながら宮浦鉱の坑内にまで広がっていて、そこに働く労働者にまで悪影響を及ぼし、悩ましているほどだ。

「会社には保安責任があるはずだ。金を惜しまぬ気さえあれば、これほど技術が開発されている世の中で、熱風を遮蔽することくらいのテのないはずがあるか」と職場は、怒りをもてあましている。

有明炭鉱計画は大合理化だ

今宮浦鉱の各職場には、すでにいろんな形で、有明炭鉱の本格的採炭開始にともなう会社の合理化の影響が出始めている。

不安は組織の別なく広がり「宮浦鉱を閉山に追いこむことをテコにつかい、会社は新労幹部をまきこみながら、なしくずしに計画をすすめてゆくたくらみに違いない。これは宮浦だけのことではなく、三池全体を規模とする大合理化攻撃だと受けとって、早くきびしい対策を講じなければ大問題になる」、との声も聞かれる。去るも地獄残るも地獄どころの話しではない。深刻な雲ゆきに、全山目を光らし、注目しよう。

塩コンブでがまんしろ

宮浦鉱でも、熱さが問題になっている職場がある。

大ガセ掘進など、そのうえ重労働でキリキリ舞い。

昼休みもないという。昼飯などベントウ箱にお茶をぶっかけ、食欲もないのをしゃにむにノドの奥につめこんでいる。

食事が終るやいなやすぐ作業場に走りこんでゆき、そしてシャベルで作業続行。

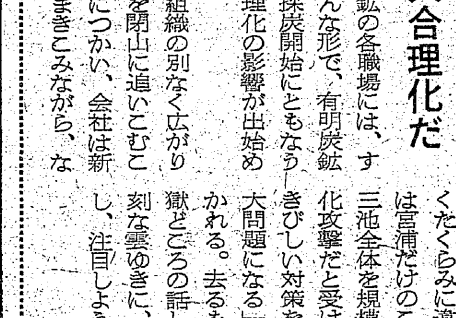
熱い坑内で働く労働者に、会社は塩コンブを与えている（三川鉱では、何かわからぬが錠剤二粒ずつ）。それをかんで水で流しこみ、熱いところでもがまんして働けというのだろうが、人間無視もはなはだしく、職場には沸々と怒りがたぎっている。

×　×

故広松分会長の死を悼む

港務指導部　中島良水

港務指導部の広松信夫・一分会長は、十二月九日作業終了後、八日の、四山鉱災害に対する三池労組の抗議ストにともなう、通勤列車乗務員の乗務時間についての、職場係長との交渉を解決し、組合に報告。もう一件交渉事項があると出かけ、交渉を終え、詰所に帰ってくると同時に倒れ、天領病院に運ばれ、家族、それに職場・地域の組合員・主婦の懸命の看護もむなしく、昭和五十年十二月十一日午後八時三十三分、脳出血にて埋まるほどで、指導部の盆栽会の



ひとくちの口をきくこともなく、奥さんと二人の子供を残して永遠の眠りについた。

故分会長は、昭和二十一年三池港務所に入社。宮浦駅に操車手として勤務しながら、定時制高校に通い、登山・野球・水泳などのスポーツでも活躍していたが、組合運動にも積極的に参加し、千二百名の解雇撤回をめざす三池闘争当時は、臨時執行部員（港務支部）として、合理化反対闘争の先頭に立って闘った。

三池闘争終了後、合理化の進行するなかで三池港駅に配転されたが、職場・地域の役員として、港務指導部議長、三池労組副議長として組合員の団結をはかるとともに、港務所の保安要員・生産委員として、保安要求の実現に努力してきた。

また、四十九年より新港地域分会長として、社宅要求、通勤通学道路問題などの解決に奮闘した。

一方社宅の裏庭は盆栽と植木で

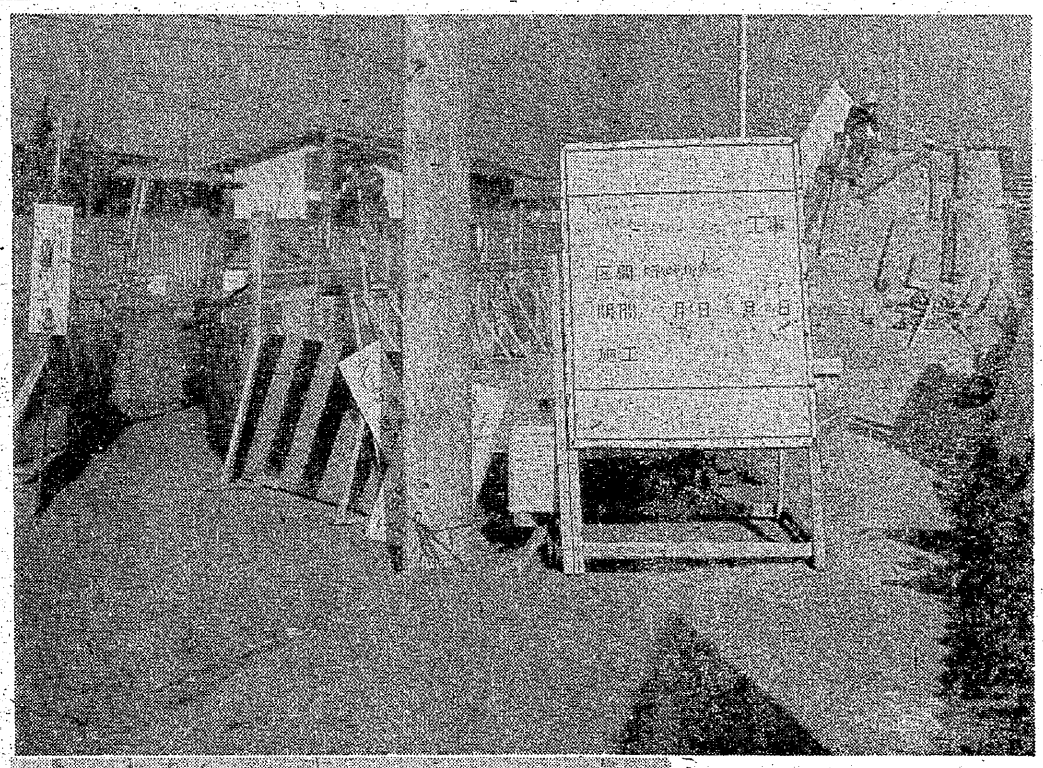
×　×

役員をするほどの趣味の持ち主でもあり、少々短気ではあったが常に笑顔を絶やさず、皆に接していた。

ここに故分会長の意志を受けつぎ、職場・地域の団結を固め、労働者階級の真の統一をはかり、搾取なき社会の実現をめざし奮闘することを誓って、冥福を祈ります。

合掌

写真は、団結レクリエーションの際、元気に踊ったこともある広松さんの姿。（左から二人目）



写真上は、面目を一新しつつある新港社宅へ通ずる諏訪川添いの舗装道路。ついこの間まで、この道路の両側にはズラリと車の列がつづき、その間を縫うようにダンプが疾走し、ハラハラさせていた。子どもたちの学校通いのために、歩道橋も建設中。すべては、諏訪川尻連協の環境改善闘争のたまもの。職場新聞〝いのち〟も、「ありがとう」と、感謝を表明している。

下は、地域分会の要求が実って舗装された、七夕社宅の道路。こうして団結の力が成果をあげる。

生産点での闘いこそ

炭労大会対策を討議

中央委

九日開いた中央委員会で、三池労組は二月末に開かれる炭労大会にのぞむその態度をきめることを職場討議へ。

炭労は今月二十六～二十八日の間東京で臨時大会を開き、春闘諸要求（賃上げそのほか）と戦術をきめるが、三池労組はかねて炭労執行部が提案している春闘方針を中央委員会で討論、同大会にのぞむその方針をきめるにいたるまでの、主な意見のいくつかを紹介するにとどめる。

――石炭見直しといっても、重大労働災害の激発となり、労働者の命が見殺しにされている。まさに石炭見直しは、労働者の立場からでなく、資本主義の立場からのものであることがはっきりした。

命を守り、閉山を守るたたかいは、生産点でのたたかいを抜きにしては考えられない。

その点から、せまられる反合理化闘争についての指導がどう行われてきたのか。その総括を十分にすることが先決。

――新鉱開発といっても、宮浦鉱の例が示すように、依然としてスクラップ・アンド・ビルド政策の推進でしかない。

また労働災害も積極的に裁判闘争など指導を強め、労災法の改正などのたたかいを推進すべきだ。それでなくて、国の政治を変えることなどできない。

――宮浦鉱の問題の推移は、合理化が三池全山に波及することを示している。それらのことを明らかにしながら、新労組員との統一行動を組みあげてゆくことが重要だ。

（以下の討論は省略）

炭労案をさらに充実し、闘う方向をより強める方針が打ち出されたが、ここでは詳述を避け、この方針をきめるにいたるまでの、主な意見のいくつかを紹介するにとどめる。

――石炭見直しといっても、重大労働災害の激発となり、労働者の命が見殺しにされている。まさに石炭見直しは、労働者の立場から

職場に見る――会社の春闘対策

節約運動

三川鉱で見られることだが、そこかしこに回収箱の備えつけがあって、「イヌクギやボルト、ナットなど、拾ったものは何でもこちらへ……」。

「鉛筆や消しゴムは粗末に扱うな」、でいつの間にか自分持ち。

「用紙は、一枚でも大切に」。

繰り込み場近くに、ボルトやイヌクギ、坑木、チエーンなどの器材を展示して、「このイヌクギは一本がいくらです」、というぐあい。

ドマ（脱線）した函は、やたらに扱えばレールや枕木を痛めるから、みんなが力を合わせてソッとレールのうえにもどそう、と呼びかける職制。

出勤奨励

休めば、すぐZD運動のグループ長をその人の家にやり、「なんで休むか」。それどころかこの頃では、職制じきじき社宅に出かけていっては主婦を狩り集め、出勤督励のPR。主婦を世話方に仕立てて、主人の尻をたたかせる。

保安カード書き

保安カードを、いやでも応でも出させられている宮浦鉱。なかには「そんなら、こっちも……」と、抵抗しようという例も耳にするが。